

平成28年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT28326

「精神障害者・回復者雇用の重要性
—医療・保健・福祉分野及び教職課程履修の上で—」



開催日：平成28(2016)年 8月 13日(土)

実施機関：沖縄キリスト教学院大学
(実施場所) (シヤローム会館1-2教室)

実施代表者：近藤 功行
(所属・職名) (人文学部・同大学大学院・教授)

受講生：高校生 33名

関連 URL：

【実施内容】

09:30～ 前説：おしゃべり(=近藤功行)
「今日のお菓子で購入のキョロちゃんの値上がり＝2010年頃は、小麦粉の高騰のせい。去年と今年、ここ1年では、10円高騰している。2010年頃より、値上がり幅が大きい。目に見えないもの。」「今日は木の絵をかいてもらいます。」「1ヶ月ぐらひかけて、最後の冊子にして、皆さんにお渡しします。」「(現在いる人に向けて、説明中)。この時点では、22名いる。

10:15集合 この時点で、欠席者4名のけて、3～4名待ち。引き続き、近藤功行が、集まっている受講生に、これから絵を描いてもらうこと、この絵を冊子にして配ることなど、上記の説明を繰り返している。

10:30～ 「現場の人間の方が最新情報を持っている。」(近藤功行)
開始(定刻スタート) 一精神神経科病院12施設訪問の話(近藤功行)；糸満市勝連病院＝MRI設置。当時、琉球大学医学部放射線科医師が同行して設置。
一病院・・・20床以上。クリニック(医院＝診療所)；有床19床以下、無床0床。無床は、入院設備がない。ベッドがあるなしではない。「20歳で発症で、30年精神神経科病院へ行った人がいる。」「でも、骨折して通常病院に転院。そこで、30年間見たことないものを見て、それ(＝例ホッチキス)は、何に使うか分からない。見たことがない使ったことがないため、という状況がおきる。」(近藤功行)
一恵川龍一郎所長は、精神障害者関連施設を運営。臨床心理の側面の話あり。これらの会話を行っている。カウンセラー。恵川所長自体、虐待の父のもとで育った経緯あり。母は、小学校教員。両親離婚後、養護施設に入所。両親の資金面での援助がない中、授業料免除制度のある上智大学へ入学。慶応大学・早稲田大学も合格するが、行くことが出来ない。お金がない。



配布資料右上69頁から・・・

- 一「左伴症候群：何かに特化した特技を持つ。でこが丸い人は大脳が発達して、よく喋る。順序立ててしゃべれるようになったらいい。直角の人は、自由にしゃべれるようになったらいい。大学でのディベート。自由に引き出しを開けられるように。」(恵川龍一郎所長)「上智大学になぜ行ったか。母親教員。父親からの虐待。養護施設出身。親からの資金援助がないため、将来ミッション系に行くと、大学無料となる。」「虐待された子供たちが持つ父親のイメージ・・・たたく、殴るなどの思い出しかない。家庭の温かさなどの語彙力の乏しさにつながる。」「目じりより耳が上にある人は、情熱的。目じりより耳が下にある人は、冷静。」(恵川龍一郎所長)。
- 一「医療の分野で仕事をしたいと考える際は、その地域の文化や実情をマッチングさせる必要がある。」(近藤功行)
(バウムテスト・障害者と健常者比較の絵柄を描く作業。手伝い学生によって、より分け。後で作成する冊子で登場する際に、個人個人を特定していないことを示すために。)

11:00～11:10 休憩

近藤功行談話：科学研究費で目指したの、目指しているもの。
一「奄美大島。部落に敷地の広い教会。地域の実情を踏まえて医療することを見ている。精神科医療の研究。」「奄美大島 医療系の専門学校1つ・短大はない。」恵川龍一郎所長談話(=奄美大島の文化・精神文化・医療を語る。)
一「見立てを立てる。短い時間で大体患者さんのタイプを把握していく。ウロボロス(=悪循環)状態にならないようにする。」「バウムテストにより相手がどんな言葉を使うか。」「毎年600万赤字。なので児童相談所に。精神病院、知的障害者の施設は戦後にできた。」
一「奄美群島内＝沖縄より先に復帰。沖縄と奄美群島内にあった特別な医療制度、医介輔、歯介補は奄美群島内から、先に無くなる。医介輔・歯介補→免許や資格がなくても治療可能(近藤功行)。
一「野戦病院はなく、風土病が食糧難よりもあった。衛生、医療、看護が発達したのは戦後。「キントウ(=喜志統)」＝恵川家のルーツ。ノロ神様。陰陽師やら、祈るしかなかった。姥捨て山に捨てるしかなかった。口減らし。生贄は名誉なことと、本当に信じられていた。」「火山の噴火防止のため、人柱をたてていた。人柱になることは名誉なことだった。」「施設経営者として、児童相談所や中学校のスクールカウンセラーとして働き、資金を貯めてきた。京都で3畳一間のアパート暮らしをして、2千万円貯めた。」(恵川龍一郎所長)。

11:10～11:55

《質問タイム》

- Q:「戦前の障害者」への配慮はどうだったのか？(男子受講生)
- A:「福祉制度、国の制度がなかった。キリスト教の人からお金を集めてやっていたことを真似て、金持ちの人が個人的に自費で施設を作っていた。何百人規模。大名が自分の領地でハン場、寄場をやっていた。」(恵川龍一郎所長)。「カウンセリングには、リラクセスが必要不可欠。鬱病の患者などは、無意識にしかめっ面になっていたり、怒りっぽかったり、過呼吸になることがある。」(恵川龍一郎所長)。

(★今日、大事なのは切り替えを覚えること。強調したいのは、りんごの絵の配布資料＝69頁！ここ！)

11:55～13:00	お昼休み(=同じ教室で昼食になる。)(恵川龍一郎所長に質問にやってくる受講生=女子数名いる。)
13:00～13:45	<p>第2部開始(=奄美文化を通して見る精神科医療の側面。)</p> <p>→研究は「何でかねえ？」から始まる(近藤功行)。</p> <p>→医科学的研究説明(科研費関連内容の補足):「タクシードライバーの健康状態を探る内容。終日、クーラーにあたりながら1日中運転して、運動をしていない。健康状態にどのような影響を与えているのか。この場合、コントロール=他地域での調査が必要となってくる。」「6年間の授業料免除の恩返しできたらいいな。」「その恩返しが、これ。ひらめきめきサイエンスとして実現と考えている。」「(近藤功行)。</p> <p>→「気分が暗くなるのは、時間の無駄。切り替えが大事。」「(恵川龍一郎所長)。</p> <p>→「10年前ぐらいから、ちゃんと、福祉施設で働くことが出来た。精神障害の患者を差別したりする時代から変わってきている。精神障害を持っている人がどのように社会で働けるか、医師がどのようなアドバイスをしなきゃいけないか。医師は経営のためだけ、福祉施設もインチャキしてお金をもらう。金もうけのためだけ。そんなところはたくさんある。患者のためを思う、ケースワーカーでなければいけない。つまり、今日大事なのは切り替えを覚えること！福祉施設がない時代、刑務所はそういう人であふれかえていた。革靴が隠された。いじめーいや、奄美の挨拶。別の視点からの切り替えができるようになるには練習しかない。出来ない人はカウンセラーになってはいけない。一点からの見方しかできないなら無理。常に視野を広げるようこしなくてはならない。姉も、養護施設。修道女になる約束で、修道院からのお金で大学を出た。ストレスからどのようにして、見方を変えていくか。ノンバーバルコミュニケーションをどのように実施していくか。</p> <p>《質問タイム》</p> <p>Q:「悩んでいる人がいてアドバイスしようとして、うまくアドバイスできずに相手を傷つけることもあるんじゃないか。」「(男子受講生)。</p> <p>A:「答えを出すことがアドバイスじゃない。悩んでいる人の考え、気持ちを受け入れること。相手の落ちをつかさねる。自分がどの言葉なら落ちがつくのか。カウンセラーにも落ちがつく言葉で行くのがある。お互いが落ちの付く言葉を選んで、共感しておちつのが大事。軽(くびき)。カウンセラーというのは同伴者。経験でしか相手の変化に敏感に気づけない。若い教員が気づけないのは経験がないから。」「(恵川龍一郎所長)。</p>
13:45～13:55	休憩
13:55～14:40	<p>(奄美大島から見る精神障害者雇用の側面。明りの家の特徴及び歴史的背景。)</p> <p>→「身体・知的・精神の順番で法律が整理されてきている。」「(近藤功行)。</p> <p>→「障害者雇用率。沖縄は、精神障害者については積極的に取り組まれている。障害者雇用率で、身体・知的だけではない、いくら身体・知的障害者までで頑張っている、トータルな数値を下げることとなる。つまり、障害者雇用率を上げるためには、最後にやってきた精神障害者で頑張っている自治体がさらに上位に食い込むこととなる。その意味で、沖縄は頑張っていると言える。つまり、精神での雇用を沖縄が頑張っていること、鹿児島県全体、奄美群島で見た時、このエリアはどうなのか。ここに着目したい。」「沖縄県・鹿児島県は、身体と知的のみの障害者雇用率で、全国レベルで見た時、トップ10に入るほど力を入れている。精神を含めると、ランクは下がると思われていたが、沖縄は精神障害者雇用率も高い。施設を創設した際、トップに立つ人の考え方でその施設が大きく変わってくる。」「(近藤功行)。</p> <p>「明りの家」、紹介(近藤功行→恵川龍一郎所長)。</p> <p>→「恵川所長の祖父は刑務官だった。福祉制度がない時代、刑務所は力の弱い障害者でいっぱいだった。秩序がない時代。」「自閉症の子は、人を殴ったりする場合もあるが、悪気はまったくない。クリスタルの瞳をしている。障害を持つ人々が社会の中で自然に生きていける環境を作ることが福祉・医療・看護である。この福祉・医療・看護の3つがきちんと連携が取れていないと実現することはできない。</p> <p>→「精神の人たちは、カウンセリングだけでよくなるわけではない。アロマも作っている。月桃、サネンのお茶を蒸留したもの。チャクラを安定させるBGM。その状態でカウンセリングするとい。」「(恵川龍一郎所長)</p> <p>(以下、恵川龍一郎所長)。</p> <p>→知的障害者、精神的疾患を持った患者は瞳孔が開くことがある。フォーカスができない。焦点が合っていない。など。しかし、これも、健常者でも、お酒飲めば、同じ状態である。</p> <p>→アニマルセラピー。どれだけ社会貢献活動をしているかの指標。メルクマール。</p> <p>→京都にいた時は、箱作りを機械で行う。奄美に帰ってきてから、畑、公民館の業者並みの掃除。(月20万入った。それが、入らなくなる流れを説明される。)。スーパーのビラ配り。施設利用者が配布に行かせても、ごみ箱に捨ててあったり、2～3階まで上がれないから1階のポストに10枚ずつとか入れてあり、クレームが来た。(この収入は、月10万あった。これも、絶たれる。)3年間の期限付きの不法投棄の回収。60トンの回収を行う。市役所からは、評価されたはず。京都は、差別の激しい場所と感じた。</p> <p>→社会貢献活動:どのくらい社会貢献活動を行っているか、厚労省によって指標として表示される。</p> <p>(★今日、大事なのは切り替えを覚えること。強調したいのは、りんごの絵の配布資料=69頁！ここ！)</p>
14:40～14:50	休憩
14:50～15:35	<p>医療・保健・福祉を読み解く視点(医学の中における、福祉の重要性)</p> <p>→「医療福祉の施設の中に、就労施設もあることがある。(近藤功行)。鹿児島県は、花卉消費量が全国1、墓花。」「</p> <p>「セレンディビティー。研究の大事さ。」「(近藤功行)。</p> <p>→「得意分野は得意、不得意分野は不得意、と人間にはタイプがある。介護する人、介助する人と心を開けなければならぬ。ある程度の医学的知識がなくてはならない。福祉で学んだテクニックでも無理。心が繋がってないと助けられない。薬をたくさん飲むから漢字も忘れてしまっている。」「ホテルの営業、クビになる。せっかく、上下の背広をプレゼントして送り出した結果が、こう。」「仮面を取り外すことが出来るようにならなければいけない。できるようになれば、人と寄り添うことが出来るようになる。フォーカス大事。周りを巻き込んで変えられる人間になれるように。」「(恵川龍一郎所長)。</p> <p>→バウムテストの解説。及び、「健常者を「○」で表すと、障害者は、何印？健常者○=障害者○、つまり、同じになることの必要性を示す視点。</p>
15:35	アンケート
15:45	修了証書授与(=受講者1人1人に、近藤功行より授与。)(=「はい、笑顔！！」と、かけ声が受講生女子らから毎回入る。)
16:05	集合写真撮影(=「ひらめきい～、ときめきい～、さいえんすう～！！」(みんなでかけ声入る。))
16:10	終了



【事務局との協力体制】

これまでの採択を通して、本学企画推進課では本事業の蓄積をはかっている。また、実施日直前の手伝い学生と共に、準備を行うことなど、実施に際してはアルバイト学生確保が必要となっている。特に、大学院生が1人いることは重要である。この年度、それはなかった。外来講師招聘に関する事務手続き、次の【広報活動】に示す[1]～[3]の事務的作業などの対応、また、実施にあたっての連携をはかっている。

【広報活動】

- [1] 沖縄県教育庁(=沖縄県教育委員会)からの後援=本プログラム採択4回目(=研究代表者・近藤功行が教育庁に出向き、依頼を行った。)から教育庁対応を諮ることになっている。教育庁は、この内容を受理した後、各高校へPDFファイル配信がなされている。
- [2] 地元新聞2紙、新聞の折り込み紙に掲載依頼をはかり、今回も複数、本プログラムの紹介がなされた。
- [3] 地元新聞2紙に、取材依頼を行い、今回は、琉球新報記者が来校。当日の様子が、写真入りで、掲載された。
- [4] 高校訪問の現状: 本プログラムは、近藤功行の所属大学への進学とは関係しないため、その広報も必要となる。そのことから、沖縄本島内の高等学校を全て訪問し、教頭先生対応をお願いし、広報活動を行った。7月3日までに、沖縄本島内の全高校をまわり終えた。(註)私立5校のうち、八洲学園大学国際高校は、この年度、初めての訪問となった。ただし、教頭先生は、昨年同様、スクーリングの時期と重なり、お目にかかれていない。そのため、沖縄本島内の高校=私立4校、県立52校、に直接足を運んだ。この日までの合計走行距離=1196km、となる。離島域にある県立高校8校、並びに、鹿児島県立与論高等学校へは郵送にて案内を送付した。実施後、報告書を作成、参加校(=欠席者含む)へ、当日の様様をまとめた冊子を作成&配布、この講座の幕を閉じることとなる。

【安全配慮】

各高校への訪問時、実験を伴わないものであるが、往路の交通などに十分注意を払って欲しいこと、こうしたことを踏まえて保険対応がなされることから、個人情報を得ることとなっている説明を行っている。また、実施場所については、エレベータが付いたバリアフリー環境が整った場所となっている。

【今後の発展性、課題】

- [1] 沖縄本島内の高校訪問と受講生確保=前回との変化を中心に。前回、沖縄本島内の高校を全校まわった。結果、受講生数は最下位であった。つまり、高校訪問と受講生数は、反比例の関係となった。学振サイドは、「受講生を増やすように」指摘があるが、過去最大限の努力を払+B72って、この結果である。その年度における学校行事、甲子園出場、また、生徒自身の波も考えられる。そのため、結果が付いてこないことは再考すべき指摘は入るにせよ、今までやって来て下さっている学校、また、受講生を大事にすることが、今後の受講生増につながるはずである。ただ、定員があるため、定員を超えることでの対応がない分、現状は助かっている。(註)定員が超えた場合、3年生を優先とする。1年生・2年生の場合、次年度、最優先でお招きする。
- [2] 今回、参観者が4名と過去最多であった。精神障害者に対する考え方や配慮が改善することを通して、受講生たちの進路に役立つことが臨まれる。当日、参加者全員が最後まで前を向き、しっかりと受講していた姿が印象的であった。また、受講生からの質問も、積極的に飛び出して来た。集合写真撮影時は、和気藹々とした光景があった。これらは、次年度採択のおり、活かして行きたい。
- [3] タイトルの指摘あり
高校生に対して、今回提示した「タイトルが重い」との指摘が、教頭先生訪問中、複数から出た。タイトルの改善について検討をはかる必要性が出た。ここについては、次回の申請時迄に対策を練りたい。



【実施分担者】

なし

【実施協力者】

6名

【事務担当者】

平良 みどり 企画推進課